西暦３０００年の昔話　その２

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
西暦３０００年の昔話　その２

【Ｎコード】
Ｎ５０６７Ｊ

【作者名】
青木弘樹

【あらすじ】
超・未来型の昔話です。
主人公は桃太郎。
さあ、いったいどんな冒険が待っているのでしょう？？？

作：青木弘樹

あれから半年が過ぎた。
プッチは人間で言えば１０歳くらいの大きさになっていた。肌の色も、ピンク色から肌色になっていた。性格も多少はやわらかくなっていた。といってもまだまだ子供。たまにおじいさん相手にいたずらをしたりもしていた。おばあさんはとても優しくかわいがったので、プッチはおばあさんの言うことだけは絶対に聞いていた。
おじいさんとおばあさんは年金暮らし。貯金も少しはあったが、お金持ちではない。
前に書いたようにまだ４０代前半だが、見た目は今の時代の六十代くらいだ。
西暦２３３６年について、少し書いておこう。
世界の人口は約５億。国は４つになっている。アメリカ、中国、ロシア、そして日本だ。
第三次、第四次、第五次世界大戦のあと、この四つになり、通貨はドルに統一。言語は四つ。
日本の人口は約５千万。かつてのイギリスなどは汚染され、人が、いや、あらゆる生物が近づけないほどにまで危険な地帯となっている。大きな壁で覆われ、隔離されている。
海は一部、生身では入れないほど汚染されている所もある。船での航海はどこも問題はない。
西暦２２００年ごろにロシアがスペースコロニーを作ろうとしたが失敗。
今はロシアとアメリカが共同で火星に居住区を作ろうとしているが、なかなか難航している。

中国は独自に木星を開拓する計画を進行中だが、これも難航している。やはり人には地球こそが最初で最後の母星なのだろうか。
おじいさん、おばあさん、プッチがいるのは日本。
プッチが誰にいつ作られたかはプッチ自身も知らないとのことだった。そして瞬く間に時は過ぎ、一年が過ぎた。
プッチの言うとおり、プッチは人間で言う１７歳くらいの青年の姿に成長していた。もう小さくないのでおじいさんとおばあさんは桃太郎と呼んでいた。
「しかし成長しましたね、おじいさん」
「そうじゃの。驚くばかりじゃわい」
桃太郎は庭の掃除をしていた。たくましくなったその姿を二人は見ていた。そしてその日の夜。
「さてと、、、」
桃太郎は姿勢をただし、おじいさん、おばあさんを見た。
「お二人さん。今まで育ててくれて感謝しているよ。約束どおり、幸せを与えるときが来た」
「な、なんじゃ、改まって、、、」
「一年前に約束したろ。一年間世話してくれたら幸せを与えるって」
「ま、まあそうじゃが、、、」
「、、、」
おばあさんは黙っていた。
「さてと、じいちゃん、ちょっと世界地図持ってきてよ」
「ん？地図か？分かった」
おじいさんは地図を持ってきた。
「えっと、、、ここだ！」
桃太郎はオーストラリアを指さした。
「そこは、、、旧オーストラリアじゃな」
旧オーストラリア。相次ぐ世界大戦で汚染された土地の一つ。今は『不可能地帯－０２３』と呼ばれている。生存不可能な地帯の２３番目ということだ。

「実はね、、、ここにはすごいお宝があるんだよね」
「お宝？」
「ああ。ワクワクボールっていう水晶みたいなボールがあるんだよ」
「ワクワクボール？」
おじいさんとおばあさんは首をかしげた。
「ああ。そのボールがあると、なんでも一つだけ願いが叶えられるんだ」
「、、、」
おじいさんとおばあさんは半信半疑だった。
「それをね、俺が取ってきてやるよ」
「、、、」
「あれ？あんまりうれしそうじゃないな」
「い、いや、、、突然の話じゃったから、、、」
「けど桃太郎や、そこは生き物は入れない場所だよ。悪性の菌がうようよしてるって、、、」
「大丈夫。普通の人間なら死んじゃうだろうけど俺は大丈夫なんだよ」
「そ、そうなのか？」
「ああ」
「しかし桃太郎や、なぜそんなことを知っているんだい？」
「ん？まあ、そういう設定だからね」
「設定？」
「いや、こっちの話。まあとにかくあるんだよ。そこには願いを叶えるワクワクボールがさ」
「ふ～ん、、、」
おじいさんとおばあさんは、やはり半信半疑だったが、桃太郎が嘘をついているとも思えなかった。
「それで、船はあるかな？街に行けばレンタルボートの店もあるだろうけど」
「いや、船はないがヘリならあるぞ」

「ヘリ？ヘリコプターかい？」
「ああ。小型の一人乗りじゃが、まだ動くはずじゃ」
「そいつはすごい。本当は船は嫌いなんだよね」
「よし。ずっと乗ってなかったのでメンテナンスが必要じゃ。明日、朝一でメンテナンスしよう」
「ありがとう、じいちゃん」
「、、、」
そんな中、おばあさんは不安げな表情だった。

翌日。
おじいさんは小屋に置きっぱなしだったヘリコプターをメンテナンスしていた。
「ふう。オイルが少ないな。入れておこう。後は大丈夫みたいじゃな」
おじいさんは快晴の空の下、少し楽しげだった。昔はよく暇つぶしに飛び回っていたらしい。
「おはよう、じいちゃん」
「おお桃太郎、おはよう。どうじゃ、なかなかのもんじゃろ？」
「そうだね。これなら船よりうんと早くいけそうだ」
「ああ。そうじゃ、これも持って行け桃太郎」
おじいさんは小屋にある木箱から棒のようなものを取り出した。
「ん？それはなに？」
「ビームサーベルじゃ」
「ビームサーベル？」
「護身用じゃ。野生の動物とかに襲われたときのな」
「なるほど。サンキュ、じいちゃん」
そして、昼過ぎ。
桃太郎は約一週間分の食料を持ち、出かけることとなった。服装は探検家のような格好だ。
「よし。じゃあ行ってくるよ」

「うむ。気をつけてな」
「桃太郎や、、、」
おばあさんが桃太郎の手を握り締めた。
「無理はしないでおくれ。危なくなったらすぐに帰って来るんだよ」
おばあさんはとても心配そうだった。
「ばあちゃん、、、大丈夫。俺は普通の人間より強いんだ。まかせてよ」
「けど、無理はしないでおくれ。お願いだから、、、」
おばあさんは涙ぐんでいた。
「ばあちゃん、、、分かった。ありがとう。もしやばそうだったらすぐ戻ってくるよ」
そして、桃太郎はヘリコプターに乗り込んだ。
操縦席から笑顔で手を振る桃太郎。ヘリコプターは大空へと飛んでいった。
「、、、」
おばあさんはそれをずっと見ていた。
「ばあさん、、、」
おじいさんがおばあさんの肩に手を置いた。
「大丈夫じゃ。あいつならきっと、無事に戻ってくるよ」
「ええ、、、」
二人は家に入った。

それから約五時間後。ヘリは順調に旧オーストラリアに向かっていた。
「お！見えてきたな」
桃太郎の目に、旧オーストラリア大陸が見えてきた。
「よし。いくぞ～」
そして間もなくして桃太郎は到着した。なにやら紫の木々が生い茂っている。
「ちょっと気持ち悪いところだな、、、」

桃太郎はヘリコプターから降り、あたりを見渡した。今のところ大きな生き物の気配はない。優しい風に吹かれ、木々が揺れる。見たことのない虫を時折見かける。
「さてと、、、」
桃太郎は目をつむり、集中した。
「、、、よし、こっちだ」
桃太郎は歩き出した。何かの生き物に襲われてもいいようにビームサーベルを握り締めて。
一時間ほど歩くと、小屋が見えてきた。桃太郎は小屋に入ってみた。
「、、、」
誰もいない。当然だが。桃太郎は少し休憩することにした。
水を飲み、缶詰をあけ、食事をする桃太郎。まるでサバイバルゲームのワンシーンのようだ。
桃太郎は疲れていたのか、少し眠ってしまっていた。そして目が覚めた頃には日も暮れていた。
「仕方ない、今日はここで一晩過ごそう」
桃太郎はまた少し食事をし、持ってきていた漫画本を読み、やがて眠りについた。

その頃。
「おじいさん、桃太郎は大丈夫でしょうかね？」
「そうじゃのう、、、ま、大丈夫じゃろう。とにかく無事を祈ろう」
「心配ですよ、、、」
おばあさんは外に出て、星空を眺めていた。
「桃太郎、、、」
おばあさんは目をつむり、手を合わせた。
「どうか、、、桃太郎が無事帰ってきますように、、、」

次の日の朝。

桃太郎は目を覚ました。よく眠れたのだろう、すっかり元気になっていた。
「さてと、まずは腹ごしらえだな」
桃太郎は缶詰を取り出し、開けて食べた。

その頃。
小屋から五十メートルほど離れた場所から何者かが小屋を見ていた。こんなところに人が、、、？
「ふふふ、、、」
その男は静かに微笑していた。

腹ごしらえをした桃太郎は、一時間ほど休憩し、ワクワクボールを探しに行くことにした。
「よし、こっちだ」
桃太郎はなぜか迷いもせず、歩き出した。まるでワクワクボールの在り処を知っているようだった。
途中、得体の知れない虫などをビームサーベルで追い払ったりふり払ったりすることもあったが、大きな障害に出会うことなく、桃太郎はひた進んだ。

そして数時間後。
なにやら教会のような建物が見えてきた。かなり大きい。しかもさっきの小屋と違い、古びていない。
「たぶん、、、ここだな、、、」
桃太郎は深呼吸した。
桃太郎はあたりを見渡した。奥のほうに宝箱のようなものがある。
「、、、」
桃太郎は宝箱に近づき、さわってみた。その時、
「無駄だよ」
後ろから声がした。見ると、男が一人立っていた。サングラスを

かけている。
格好は軍服のような格好だ。
「お前は、、、？」
「俺は金太郎だ」
「金太郎、、、！？」
「その宝箱の鍵は俺が持っている。中身がほしけりゃ、俺を倒すんだな」
「、、、」
「いくぞ！」
金太郎はいきなり襲い掛かってきた。手には大きな斧を持っている。
金太郎は飛び掛ってきた。そして大きな斧を振り下ろした。
「くっ！」
桃太郎はビームサーベルのスイッチを入れた。持ち手の先端から青白いビームが飛び出る！
”バチィ！”
斧がビームサーベルに触れた瞬間、凄まじい音が鳴った。そしてビームサーベルに触れた部分が溶け、煙が出た。焦げ臭いにおいもする。
桃太郎は後ろに下がった。金太郎も後ろに下がった。
「ほう、、、ビームサーベルか、、、面白いものを持っているな」
金太郎は持っていた斧を捨て、背中から長さ1メートルほどの鉄の棒を取り出した。
「では、、、こちらもビームアックスを使うか」
「、、、！？」
金太郎はその棒のスイッチらしき部分を押した。すると、
”ブンッ！”
なんと先端から赤く光る斧状のビームが現れた。
「！！」
「さてと、ここからが本番だな」

金太郎は楽しそうだった。
「ま、待て！」
桃太郎はとっさに言った。
「どういうことなんだ？なぜ戦わなければならないんだ？」
「うん？それは、そういうゲームだからさ」
「ゲーム？」
「浦島博士の考えたゲームさ」
「浦島、、、博士？」
「どうやらお前の記憶はあいまいのようだな。俺に勝ったらすべて教えてやるよ」
「、、、」
「さあ勝負だ！」
金太郎が笑みを浮かべて襲い掛かってきた！
「くっ！」
素早くかわす桃太郎。
「逃げてばかりか？臆病者め！」
「、、、」
さらに襲いかかる金太郎。
「ちっ！」
”バチィィ！”
ビームサーベルとビームアックスが交わり、火花のようなものが飛び散る！
「はっ！やるな、ぞくぞくするぜ！」
金太郎は楽しそうだった。
「、、、」
桃太郎は不安げだ。
さらに襲いかかる金太郎。不意にしゃがみこみ足払いをする金太郎。
「うわっ！」
桃太郎は転んでしまった。

「死ねえ！」
ビームアックスが桃太郎の脳天めがけて振り下ろされる。
”バシィィ！”
「うおっ！」
桃太郎は間一髪かわした。そしてその瞬間、ビームサーベルを金太郎めがけて突き刺そうとした。
”シュバァ！”
「ぐわっ！」
ビームサーベルは金太郎のわき腹をかすった。
「くそお！」
金太郎は後ろに下がった。
「はあはあ、、、」
「はあはあ、、、」
二人の心臓の鼓動は、これまでになく激しくなっていた。
「仕方ない。これを使わせてもらう！」
金太郎はポケットから何かを取り出した。
「くらえ！」
金太郎は何か丸いものを地面にたたきつけた。
「！？」
それは煙幕だった。
「やあああ！」
視界のさえぎられた中、金太郎がいっきに襲いかかってきた。
「うおおお！」
桃太郎もひるまず応戦した。
”ズバァ！”
金太郎のビームアックスは桃太郎の頬を軽く切り裂いた。
そして桃太郎のビームサーベルは金太郎の腹をつらぬいていた。
「ぐわあああ！」
金太郎は倒れこんだ。
「、、、」

桃太郎は少し震えていた。
「くくく、、、やるな、、、お前の、、、勝ちだ」
「、、、」
「約束どおり、鍵をやろう」
そう言うと金太郎はポケットから鍵を取り出し、桃太郎のほうに放り投げた。
「さあどうした、、、宝箱を開けるがいい」
「、、、」
桃太郎は鍵を拾い、そして宝箱を開けた。
「!、、、これは?」

★その３へ続く★

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5067j/

西暦３０００年の昔話　その２

2010年10月8日15時13分発行